

第7表 台風の中心示度の最深と御前崎の最高波高

年 月 日	台 風 名	最大波高 及び起時		中心示度 の最深	台風ま での最 短距離
		m	日 時	mb	km
26. 8.13~24	Marge	2.24	17. 21	900	1240
	Ora	1.05	18. 23	970	1400
	Ruth	2.70	14. 18	925	300
	Thelma	1.14	30. 17	950	580
27. 6.21~24	Dinah	1.64	24. 5	970	1.5
	Jeane	1.52	7. 18	985	32
	Karen	1.02	16. 16	960	750
	Polley	1.76	1. 16	970	490
	Agness	1.46	6. 12	920	400
	Cormen	1.08	25. 12	970	730
28. 7.29~2	Lorna	1.57	1. 22	970	320
	Mamie	1.12	4. 23	980	270
	Nina	1.93	15. 8	885	1610
	Rita	1.73	29. 19	940	1650
	Tess	3.04	25. 17	915	70

同前技術係長長田喜正技官以下職員の方々、および窪田浜松測候所はじめ同所職員の方々には多大のご協力を煩した。末尾乍ら以上の諸賢に深謝申上げたい。

(32. 3. 25稿)

参 考 文 献

- 1) 太田芳夫：御前崎灯標建設調査報告（未刊）
- 2) 中央気象台：日本台風資料 第1, 2, 3 卷追補
〃 台風経路図
- 3) 太田芳夫：御前崎の波浪について（1952）東京
管区気象研究会誌 第11号 P. 238~243
- 4) 例へば日本版では久保時夫、磯崎一郎訳；Wil-
lard J. Pierson 外：大洋の波の新しい予報法
（気象協会）

土木学会海洋工学委員会訳：J. W. Johnson
編海岸工学（丸善）外

本報告に関しては東京管区気象台長小平先生には多大の御支援を戴いたし、同台技術課、牛山御前崎測候所長、

大 気 乱 流 分 科 会 講 演 会

（6月17日 気象庁第一会議室）

講 演 題 目 と 要 旨

1. 井上栄一（農技研）：接地気層における自由対流について

風速が極めて弱くなると従来の空気力学的輸送量測定法の基礎となっている物理量高度分布の対数法則が適用されなくなるため、そのような場合に使用し得る輸送量の計算式の必要さが痛感されていた。日中の自由対流が卓越する場合に輸送量計算式を次のように求めた。

$$P = K \frac{dC}{dZ} = H_c^* \left(\frac{g}{\theta_0} \right)^{1/2} \left| \frac{d\theta}{dZ} \right|^{1/2} Z^2 \left(\frac{dC}{dZ} \right)$$

2. 根本 茂（気象研）：粗面上の風速の垂直分布（風洞実験）と自然風の垂直分布の相似について

派れに対する表面の力学的影響を表わす特徴量である摩擦係数を等しくするという考えのもとに、中立状態における上記の問題を調べたので、その結果および、この結果を用いて風洞実験によって得られた粗面上の風速の垂直分布と自然風の垂直分布（台風時の市街地上空の風速）と一致させた2, 3の具体例について述べる。

3. 武田京一（九大農学部）：大気乱流の研究(第5報)

温度成層のある場合の摩擦速度、拡散係数、カルマン定数、等の特徴量を、中立状態のそれぞれの値に補正関数を乗じた形で表わし、エネルギー逸散の方程式をも考慮に入れて関係式を作り、之より風速の高度分布の式などを求めた。

4. 高橋淳雄（鹿児島大 水産学部）：海面上における微細気象の観測および研究

1953—1956年に鹿児島湾に於て海面上の風速、気温、蒸発量等が観測された。風速のプロファイルから、海面上の流体力学的に滑らかな層の上に陸地の影響を受けている層があり、その境界の高さを安定度 fetch 等の関係において調べた。又風速分布と風波との関係等も調べた。

5. 小沢行雄（農技研）：土壌面蒸発量推定の試み

1957年11月、館野における接地気層の観測資料を用いて、i) Thornthwaite & Holzman, ii) Monin & Obukhov, iii) 分子拡散係数を用いる、の三方法により蒸発量を計算し、それらと土壌面蒸発計による実測値とを比較した。（大気乱流分科会 井上栄一）